

教員学術研究会（平成16年度）要旨

7 月

○ 英語史研究を考える ―― 一つの視点／小川 浩

ここでいう「一つの視点」とは文献学的視点であり、要するに「個々の文献は単なるその時代の言語資料ではない。それぞれが個性を持った存在であり、その個性に即して一つ一つの作品の言語を分析し、その歴史的な意味を考える」ということである。言い換えれば、一つの作品は英語史の一時点の姿を示すと同時に、その時代の英語の varieties の一つを表している。この後者の側面（特に文体の問題）を掘り下げることが、現在の英語史研究に求められている。この観点から、(1) Wycliffe 訳と欽定訳聖書（Matt 2:1-13）の完了形、(2) 古英語説教散文とロマンスの話法、(3) Ælfric の文体と統語法の3点について考えた。

2 月

○ The Effects of Explicit Teaching on Pronunciation／Michael K. Snyder・Atsuko Kashiwagi

In this presentation we presented the results of our recent study of the effects of explicit pronunciation instruction on improving over-all pronunciation. We found that there seems to be a positive effect. Moreover, explicit instruction in segmentals (phonemes) also had a positive effect. We found, too, that the ability to produce segmentals sometimes preceded the ability to perceive them. These results run counter to the commonly accepted claims of communicatively based approaches, which have formed the basis of the change in the *Monkasho* (MEXT) guidelines for language teaching in Japanese high schools. These guidelines seem to promote a less explicit approach to language teaching, including pronunciation. We considered the implications of our study for these guidelines and how pronunciation should be taught. We presented the results of other studies that both support and run counter to the claims of the communicative approach. We concluded that focusing only on suprasegmentals may be a mistake and that explicit instruction in segmentals could have positive effects for Japanese students. With the goal of intelligibility rather than a native-like accent, further research is required to determine which aspects of English phonology are most important for Japanese students to learn for improving intelligibility.

○ アングロ・サクソン時代におけるラテン語教育について／宮崎 ひろ美

ラテン語は、キリスト教の布教とともに、アングロ・サクソン人のもとに入ってきた。Augustine が597年に来島し、布教をはじめてからも、当初はラテン語教育が進展することにはなかった。669年に Theodore がカンタベリー大司教になり、Hadrian とともにカンタベリー学校（the school of Canterbury）を創設してから、アングロ・サクソン人に対するラテン語教育がはじまり、その後、さまざまな工夫がほどこされることになる。例を挙げると、読解力向上のためには、難解なラテン語の文章の上または下にアルファベット、点、ローマ数字、記号をふるなどして、読み方の手ほどきをしたり、発話力向上のために、Ælfric や、その弟子の Ælfric of Bata は、日常生活によくある会話から修道院内での会話などを Colloquy に編纂し、生徒に暗記させていたりした。

この時代にラテン語を学ぶのはキリスト教に従事する人や王族の一部など、非常に限られた人たちだったが、母語である古英語ですら文盲率の高い時代に、第2言語としてラテン語を教えるには、現代の第2言語習得とは違った創意工夫が必要だった。